

収穫の秋 米検査始まる



初検査全量1等

9月10日(木)、平成27年産米の初検査を、JA南部低温倉庫で行いました。

同日は生産者4人が持ち込んだ、うるち玄米「こしいぶき」257・5俵(1俵60kg)を検査し、全量1等となりました。

農産物検査員が、集荷した米袋から穀刺を使って玄米を取り出し、検査用の皿に載せて、形質や整粒歩合、被害粒の割合などを確認。1等米の基準をクリアした米袋には、次々と「1等」を示す印を押ししていきます。

初検査を終え、JA営農

生産部米穀販売課係長の和田孝昭検査員は「出穂時期の高温により乳心白粒の発生が懸念されたが、一部で高温障害による基部未熟粒が見受けられたものの格落ちまでには至らず、粒張りも良く、全量1等に格付けされた」と講評しました。

当JAでは、初検査を行った南部低温倉庫を皮切りに、管内4力所で検査を実施。9月下旬をピークに10月上旬まで続く予定です。

当JA全体では、約12万3000俵の検査を見込んでいます。

9月17日現在 検査結果

17日現在の1等米比率は85・1%で、検査結果は左記の通りです。

集荷予定数量に対する集荷率は5・9%で、7246・5俵に対し、1等米は6165・5俵、2等米は1068・5俵、3等米は9俵、規格外は3・5俵という結果です。



平成27年産米情勢を意見交換

昨年を上回る米卸31社が参加

「魚沼米懇談会」

9月3日(木)、魚沼地区6JAで構成する魚沼米対策協議会は、津南町で平成27年度魚沼米懇談会を開き、魚沼産コシヒカリの販売について意見を交わしました。懇談会には全国の米卸や県・県の関係機関、JA全農に

職員ら、総勢69人が参加しました。同協議会の瀧澤勝会長(JA津南町組合長)のあいさつ及び来賓祝辞の後、全農が①高品質米の安定生産②JAグループへの出荷結集③販売力の強化の取り組みを説明しました。続いて各JAが重点取組と生育状況を報告。当JAは、品種別収穫時期と胴割れ被害防止のため適期収穫を勧めていることなどを説明しました。

意見交換では、米卸から「収穫前基準価格や生産者仮渡金が上がったことから、精米価格の値上がりは必至であり、卸売業者や消費者の購入意欲が高まらない」などの声があり、産地側からは「再生産さりのぎりの価格であることから、一層の販売協力を願いたい」などの申し入れを行いました。



▲魚沼産コシヒカリの販売について意見交換が行われた魚沼米懇談会

宣伝・販売に力

ブランド強化柱に

「新潟米懇談会」

9月8日(火)、JA全農にいがたは、新潟市内で新潟米懇談会を開き、全国の米卸などに対して平成27年産米の販売方針を示しました。懇談会には全国の米卸やJA、県などの関係者100人ほどが参加しました。全農は、販売・宣伝の強

化の取り組みなどを説明しました。中でも販売・宣伝は、ブランド力強化とファン拡大が柱です。テレビコマーシャルに登場する書道家の武田双雲さんが「新潟産米には心を揺さぶる味がある。生産者には日本一の米を作り続けてほしい。一緒に頑張ろう」とビデオメッセージを寄せました。食体験イベントでは、女性農業者でつくるライスガールがPRイベントを展開します。また、物流の効率化・省力化が期待できる「一貫パレット輸送」を米卸に提案しました。

参加した米卸からは「全国のトップ産地としてリーダーシップをとってほしい」「もっと集荷を頑張ってほしい」などの声が上がりました。



▲あいさつをする全農にいがたの今井長司会長

精米施設を移転

9月28日稼働

9月28日(月)、精米施設

を、上ノ山低温倉庫内に移転・稼働しました。山谷の第2カントリーエレベーター敷地内からの移転は、施設の老朽化によるものです。

9月8日(火)には、上ノ山低温倉庫内の新精米施設で引渡式を行いました。谷口熊一組合長は「消費者の皆さんに、よりおいしく、安全安心なお米を届けたい」と話しました。

新精米施設の連絡先・住所は14ページをご覧ください。



▲新しい精米施設を確認するJA役職員ら